
タイムジャン！クション！

かまってジョニー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

タイムジャン！クション！

【Nコード】

N8017Y

【作者名】

かまってジョニー

【あらすじ】

全人類が未来を見た。

様々な人々の思惑が行きかうなか、一人の少年は歴史の分岐点に立たされる。

1 Beginning

ビイイギイッスンダ

始まり（前書き）

初投稿になります。

1 Beginning ビイイギイツニング 始まり

「ビジョンの日からもうすぐ一週間。 当テレビ局にも視聴者のみなさまからのフューチャービジョン報告はあとを絶ちません。」

「もうすぐ国が調査に乗り出すとか。」

「ええ、そうなんです。 現在、報告例の多さに国が調査する姿勢を見せております。 当局の調査では現時点で国民の5割がフューチャービジョンを体験したのではないかという結果が出ています。」

「5割も？ という事はまだまだ増えるんじゃないですか。」

「はい。 海外では事態の発覚が早く、正式に国民がフューチャービジョン体験をしたと発表した国もあります。 全人類があの日フューチャービジョンを体験した可能性も考えられ……」

「いやいや、それはいくらなんでもオーバーすぎるでしょう。 たしかに内向的な日本では事態の発覚に時間はかかりましたけど、海外の公正機関がしっかりと調べたのか疑ってしまいますね。」

「そういう今井さんは見たんですか？」

「まゝ見ましたよ。」

「どんな未来を？」

「ははは、それは秘密ですよ。」

「秘密にするほどの未来でもあるんですか？」

「酷いな、僕にだってあつと驚かせるような輝かしい未来がありますよ。 どうせ未来なんですからいずれわかりますけどね。」

「そうですね。 今井さんの動向に注目です。 では、次のニュースです。 7日前ニューヨークで起きた高層ビル崩壊の原因は未だ不明ですが爆発などの痕跡があり、テロのかのう……。」

俺はリモコンのボタンを押してテレビを切った。

朝から広いリビングには似合わぬ食パン一枚という朝食をかじる。 冬の気温のせいでコーヒーのカップからは湯気が立っていた。

「キョウスケー」

窓の外からいつも通りの鬱陶しい声がした後、窓が数回軽く叩かれたので窓を開けに立ち上がった。

以前にこれを見無視し続けた結果、怒られた事がある。

「いま行くよ」

ストッパーを外して窓を開けると隣接する隣の家の窓から身を乗り出した幼馴染の篠旗しのはた楓苑かのんが弁当箱を差し出してきた。

彼女の黒い長髪を家と家の隙間から差し込んでくる朝日が照らす。狭い土地ではないはずだが、ここの建築はなぜか家々がかなり密着した状態で立っている。

そのため、こういうご近所間のスキンシップ？も可能なのだが、俺にとっては毎朝鬱陶うつとうしい事この上ない。

「あのさ、もういいんだよ。うん。もういい。」
「なにが。」

「いつも言ってるけど、いちいち作らなくていいって。食費はちゃんと仕送りしてもらってるから昼飯はそこで買っよ。」

「私はおばさんから面倒を頼まれてるの！ あんた、どうせろくなもの食べないでしょ。」

そういつて楓苑かのんはさらに身を乗り出して部屋の中を覗こうとする。すかさず窓を半分閉めてテーブルの上を隠した。

「あつ。今隠した！何食べてるか見せなさいよ。」

「テキストに食ってるよ。わかった、わかったから。弁当よこせ。」
そう言って手を差し出した。

「ったく、ほんとにもう。」

彼女が少し怒った風に渡してきた弁当箱は温かった。

「一応。作ってくれてありがとな。」

「一応ってなによ。別におばさんに言われてるから作ってあげてるだけだからね。」

「わかってるよ。」

なんだかんだで小さい頃からの腐れ縁である。

両親が海外に出張に行くようになってからは俺がだらしないのを知

ってか弁当を作ってくれたり、たまに家の掃除をしてくれたりやけに世話をやく。

口うるさく言ってきて、鬱陶しく思うこともあるが生活面では助かっているので素直に感謝していた。

もう窓を閉めようとした時、向かい側の部屋で暗い顔をしている楓苑が見えた。

「どうした、楓苑？」

少しためらった後、下を向きながら彼女は言う。

「恭介さ…^{きょうすけ}どんな未来みた？」
言葉に詰まった。

来ると分かっていた質問、世間であれだけ騒がれているのに俺と楓苑の間ではこの一週間、まったくこの話題について話さなかった。

あえて避けていたのかもしれない。

一週間前、授業中になんの前触れもなく急に幻が見えたあの日。

後で時計を確認してわかったが現実では1分程度しか経っていないかったのに、かなり長い時間と思える時間、いろいろな幻の場面をさまよった。

それから三日程経ってからネットやテレビでも幻を見たという人が出てきて、さらに幻で見たことが現実起こったと言う証言が多数あり、世間では未来視だ^{フューチャービジョン}と騒がれている。

「俺は、覚えてない。」

「そう…。」

「いや、ほら。俺、たぶんあの時さ授業中だったから寝てたんだよね。夢のようでボンヤリしてるというか。」

本当はボンヤリなんてしていない、寝てもいなかった。

いろいろと訳のわからない場面はたくさんあったが、あの場面だけはクツキリと頭に残っている。

楓苑^{かのん}の親父さんの葬式にいた自分

たぶん楓苑も見ている。

あの日、幻を見終わってからしばらく教室には沈黙が流れていた。ただしくは教室の中にいた生徒全員がおそらく俺もしていたであろう目を見開いた顔で黙り込んでいた。

その時、横の席にいた楓苑が一瞬表情を曇らせたことを俺は知っている。

「そうよね。恭介きょうすけのことだもん、そんなことだろうと思った。」

二人の間に流れた沈黙を楓苑の無理したような明るい声が終わらせた。

「なんだよ俺のことって。授業聞いてなくてもテストの点はいいからな。」

「良いって、何点かいつてみなさいよ。」

「平均点よりは上だ。」

「まあまあね。」

「大きなお世話だ。」

「まったく。」

呆れ顔の楓苑にはいつも通りの笑顔が戻る。

「つま、あれだ。テレビでフューチャービジョンだとか言われてるけど、別に幻で見た事が起きるって決まったわけじゃないさ。」

「そう…だよな。」

「きつとそうさ。」

「それじゃ、また後で学校でね。」

「おう。」

そう言うってお互いに窓を閉めたあとも、しばらく窓の側から離れられなかった。

あんな言葉で彼女に偽りの安心を与えてよかったのだろうか。

かなりの人が幻で見た事が現実に来きたと言っている。俺の見た幻だって現実になってしまいかもしれない。

まとまらない考えを振り払いながらテーブルに戻り、冷めてしまったコーヒーを飲みほした。

イギリス あるきらびやかな邸宅

「ねえ、サヤ。あなたどんな未来みたの？」

壁に豪華な装飾が施された部屋で四人の少女達がパジャマ姿で寄り添っていた。

「私の？」

「そう」

「知ってたーい」

「聞かせて聞かせてー」

まわりの少女たちに詰め寄られた中央にいるサヤと呼ばれた明るい茶色の髪色をした少女は、少々顔を赤らめながら言いつた。

「えー、じゃあ一人ずつ言ってこようよ。」

「まず、シンシアから。」

「わたしっ、私が最初なの？」

「そうよ。あれ？ シンシア慌ててるって事は？」

「もしかして今の彼となんかあったの？」

「ちっ、ちがうよ…ちがくも…ないけど。」

「ほらほら早く言う。」

モジモジするシンシアという少女をサヤがせかす。

「私が見た未来はね…」

徐々に小さくなっていくシンシアの声に周りの少女はさらに寄り添って耳を近づけた。

「きゃー、シンシアったら彼氏さんー」

「シンシアおとな」

話を聞いて騒ぎ始めた少女達にシンシアは顔を赤らめて抗議した。

「もう、サヤまで。そんな大声で言わないでよ。」

「大丈夫ここは私の寝室よ？ パジャマパーティーの事は使用人達にも言つてあるから部屋の外に人はいないわ。」

「いいわよね」ドーンチエリーブロッサム 暁桜グループのご令嬢さんは。」

少女の一人が冷やかしの目でサヤを見る。

「ナンシー。あなたのお父さんの会社だつてすごいでしょ？」

「こらこら、サヤもナンシーもこんな所にまで階級話を持ち込まないの。シンシアがおどしてるじゃない。」

険悪になった空気をみかねて、少女達の中でも大人びている少女が仲裁に入った。

「だつてリリー、サヤがはじめたんだもん。」

「ちがう、ナンシーからよ。」

「はい、もうおしまい。サヤ、次はあなたの番よ。」

「もう私なの？」

「そう、喧嘩したからあなた」

「わかったわ。私はね」

間を置いたサヤに少女達は聞き入る。

「私は、おんぶされてる所を見た。」

「おんぶ？」

「おんぶ？」

「おんぶ？」

サヤの言葉に少女達は頭に疑問符を浮かべたかのように首をかしげる。

「それって、お父さんにおんぶされたつて事？」

「違うわ。別の男性によ。」

「彼氏の人？」

「シンシア、サヤに彼氏なんていないでしょ。」

「そっかー、サヤにはまだ彼氏いないもんね。」

「馬鹿にしないでナンシー。私をおんぶしてたのはちょっと年上の男の子だったわ。」

「サヤってロマンチックなんだね。」

「それで。早く誰なのか言いなさいよ。」

「私もわからないの、周りが暗くてよく見えなかったし。でも他に見た場面でみんな日本語しゃべってたからきつと日本ね。」

「日本人って事？ サヤのお父さんも日本人だったよね。」

「そう。私ハーフだもん。」

「今度：お父さんの実家にでも行くのかな？」

「そしてそこでサヤは運命の人と出会ったのでした。」

「すてきー」

シンシアの一言で盛り上がる二人の少女。

「それはないわ。お父さん昔の事とか話したがないの。日本語は教えてくれたけど、日本について聞くといつもごまかすから。」

「何か事情があるのかもしれないね。」

「うん。だから私、一人で日本に行こうかなって思ってる。」

突然のサヤの言葉に少女達は困惑した。

「もう決めたの？」

「3日後には出発するつもり。」

「でも、でもお金とかは？」

「お金は大丈夫、使用人に言って私の口座に準備させた。」

「あぶないよ……。」

「使用人を一人つけてくから問題ないわ。」

三人の少女は心配そうな顔つきでサヤを見る。

「でも、名前も知らないのにその人の事探せるの？」

「名前はね、知ってる。おんぶされてた時に私、その人の事呼んだの」

「キョウスケって」

「なあ、キョウスケ。お前は俺の未来についてどう思うよ。」

一日最後の授業が終わったあとのホームルーム前の時間。

教室内の生徒たちは部活の準備をする者や帰るしたくをする者たちで賑わいでいた。

その中で、帰り支度を終わらせた六波羅ろくはら きよつすけ 恭介に話しかける男子生徒が一人。

「黒髪短髪美女をお姫様抱っこするっていうやつか？ それともブロンドお姉さんにぶつかっちゃってラッキースケベするやつか？」

「どつちも」

「静司せいじ、可哀せういそうな君に一言だけ言ってやろう。それは未来じゃない。妄想だ。」

「いやいや、たしかにフューチャービジョンの時にみたんだって、ほんとに。」

「授業中だったから寝ぼけてたんじゃないのか？ それかお前だけ未来じゃなくて妄想が見えたとか。」

「んなわけあるか。あれだけフューチャービジョンの時に見た幻が現実で起きたって人がいるんだからよ。俺だって」

「ないない」

隣の席で楓苑かのんが手を振りながら言う。

「なんでだよ。」

「別にだれしもが現実にかかるなんて確証ないでしょ。フューチャ

ービジョンって言葉だつて最初に幻で見た事がたまたま現実で起こった人が勢いで言つた言葉かもしれないし。

第一ね、万年女運の無いあんたに限ってそんな事がおきるなんて絶対ない。」

「うわー。万年男運の無いカノン様に言われたら終わりだわ。」

「ちよつ、ちよつと何よ男運ないって、私にはね恭介が……」

慌てて抗議した楓苑の最後の方の言葉は小さくなって周りの賑わう空気に溶けて消えた。

「俺がどうした。」

自分の名前が出た事に恭介が反応する。

「鈍いねー恭介君。鈍すぎるよ。うらやましく鈍いわ。」

「なにが。」

「うんうん、その純情さを貫きなさい。」

意味がわからず眉をひそめる恭介に対して静司はうなずきながら恭介の肩を叩く。

二人がじゃれあっていると教室のドアが開いて担任の教師が入って来た。

「号令。」

教師がそついうと前の席にいる生徒の一人がクラスに声をかけて挨拶を済ませ、ホームルームが始まる。

教師が連絡事項を話終えると、再度号令がかかりホームルームは終了となった。

楓苑や教室の生徒が帰っていく中、同じく帰ろうとした恭介を静司が呼び止める。

「ところでよ、恭介。お前まったく自分のフューチャービジョンについて話さないけど、どんなの見たんだ。」

「俺、その時寝てたからあんましく覚えてないんだよな。」

今朝同様に恭介は質問を流そうとする。

「嘘つけ。俺が意識ハッキリして後ろ向いた時にはがつつり両目を見開いてたじゃねーか。」

「あれだよ、あの幻が見えた時間帯に寝てた人は違和感で起きるってテレビでも言ってただろ。」

「あー。確かに言ってたな。でも、お前少しも覚えてないのか？ テレビじゃ寝てた人でも見えてたとも言ってたぞ。」

「まあ、少しだけなら覚えてるよ。」

「で、どんなのだった？」

興味津々に聞いてくる静司に質問をかわしきれないとわかった恭介はしぶしぶ答える。

「女の子」

「女の子？！ 女の子が出てきたのか？ 純情ロマンス恭介君もついに不届き者になってしまったか。」

「いや、そういうのじゃなくて。ってかなんだよ純情ロマンスってさ」

「そこはいいんだよ。そういうのじゃなくてどういふのなのか早く言え」

「茶髪の女の子をおんぶしてたんだよ」

「おんぶっ！ 男女が体を密着させるやつだなわかるぞ」

「だからそういうのじゃなくて」

「そういうのじゃなかったらどういふのだよ。年頃の男女のおんぶイベントはな、ああ来てそう来てそうなるのが相場なんだ。」

「どう来てどうなるのか知らないけどな。そういう楽しいイベントじゃないんだよ。」

一息ついて、恭介はゆっくりと言う。

「俺が見た幻の中じゃ、俺もおんぶしてた子も血まみれだったからな。」

2 The past ザッ・パアアッスト 過去

1週間前 ニューヨークのとあるビルで

狙撃銃を床に設置すると月明かりで照らされたコンクリート張りの部屋の中はいっそう殺伐として見えた。

建設途中のビルにはまだ窓も設置されておらず、入ってくる夜風がコートをなびかせ、タバコの火を赤く燃焼させる。

最後にタバコを一度大きく吸った後、煙を吐き出した。煙は吐き出した側から風に煽られて横に流れていく。

「風速は2ぐらいか。」

手に持っていたタバコを指で弾いてビルの上から落としたあと、辺りを見渡す。

ビルにはまだ壁が設置されておらず視界は開けていた。

床に這って設置された狙撃銃のグリップを握る。

スコープを覗いて銃を調整し、向かい側にある華麗なビルの一室に照準を合わせた。

ほぼ部屋の全域に照準が届くのを確認したところでポケットの携帯が鳴ったので取り出して通話ボタンを押す。

『黒カラス コルボネロ、時間だ。』

「準備はできています。」

『さすがだね、仕事が早くて助かるよ。』

「先日頂いた情報に間違いはありませんね？」

『間違いはない、あと数分もすれば彼は現れるだろう。』

「わかりました。終わったあとに追って連絡します。」

そう言って携帯を切ってから銃を持ち直した。

今までの経験からも、口は災いの門だと理解している。どんな時也需要以上の会話は交わさない。

照準から見える全ての事に集中した。

コートを通して伝わってくるコンクリートのひんやりとした感触が体を冷ます。

こうして銃を握っていると、昔のことを思い出しそうになる。

12年前のあの日。

そういえばあの時も月が出ていた。

ローザ

思い出から浮かび上がってしまった名前。

いまは思い出すべきではない。

いったんスコープから目を離してゆっくりと瞼を閉じて意識を集中しなす。

そして再びスコープに目を当てると、部屋に数人の男が入ってきた。黒色のスーツの欧米人が一人、二人、三人。紫色のスーツのが一人。そして…

いた。

情報通りに眼鏡を着用したグレーのスーツを着た中年の日本人男性。一見どこかの会社員のようにも見える。なぜ彼が狙われるのか不思議に思えるほど平凡な風貌。

依頼主からの情報はそこまで詳細ではないが、この仕事が無難ではないということが確認できる最小限の情報さえあればいい。

やがて男たちは会議用のテーブルを囲んで座り、談話を始めた。

ゆっくりとグレースーツの人物の頭部に照準を合わせ、風も計算に入れて少々横にずらす。

そして、引き金に指をかける。

風が止んだ。

胸内で舌打ちをして、もう一度照準を直した。
もう、風が吹く様子はない。息を止めて照準のブレを無くし、意識を極限までスコープに集中した。
そして、引き金を絞る指に力をかける。

「離して。」

抱えている少女が腕の中で暴れた。

「何してる！」

「こちらの私情だ。」

掴みかかってこようとする青年を蹴り倒す。

「ぐふっ」

青年は蹴り倒されてもなお睨みつけてきた。

「お前…誰だよ」

「いい目をしている。許せ。」

そう言って少女を抱えていないもう片方の手に持っていた銃で目の前の青年を撃ちぬいた。

横に一歩うごいて、後ろに座らせておいた茶髪の少女を目の前にいる男に見せる。

「早弥^{はやや}！」

後ろに現れた少女の顔を見て目の前の男は叫んだ。

少女は今にも叫びだしそうにしていたが、口に貼ってあるテープのせいで声は出なかった。

「謙、立場が逆になった気分はどうだ？」

「あいつらは…あいつらは全員始末した。 本当だ！」

「知っている。俺はまっさきにやつらを殺しにいかうとしたからな。だが、そんな事はどうでもいい。大事なのはお前が何をしたかだ。」

「あの時は、やるしかなかったんだ。わかってくれ。」

「なあ、謙。この娘に俺が助けてやるって言ってくれ。」

「…敏哉、すまない。本当に悪かったと思ってる。」

「言ってやってくれよ。俺が助けてやるって。」

少女に近づき、頭を抱え込んでから銃を頭部に押し当てる。

「敏哉、やるなら俺をやれ！」

脅しとして銃を床に向かって撃った。

銃声に驚いたのか、少女の涙が抱えていた手に落ちる。

「言え！」

少女の父親は口を震わせながら言った。

「早耶：大丈夫だ。父さんが、助けてやる。」

『目標は死んだよ。コルボネロ。』

耳につけた携帯のスピーカーから聞こえてくる声は前よりも少々幼く聞こえた。

「そうですか。こちらのミスで手数料をとらせました。報酬の方は前払い分だけで結構です。」

『いいよ。僕もあの時、変な事があったからね。報酬は払う。でも、支払方法と場所はこちらできめさせてもらおうよ。』

「わかりました。どこですか？」

『我々が次に会う時、で。』

「は？」

『ふふふ、それじゃ』

服を脱いで洗濯機にぶちこむ。

シャワーを浴びて、髪の毛などにまだ残っているホコリを洗いとる。シャワーから出ると備え付けのバスローブを着て、疲労感からベツトに倒れこんだ。

意識が眠りに落ちかけた時、不意に部屋のチャイムが鳴った。

「ルームサービスです」

「頼んだ覚えはないですが？」

「ホテルからのサービスです。」

気怠い^{けだる}からだを引きずりながらドアを開けに行く。

念のためにのぞき穴から外を確認するが、ホテルマンが一人トイレを持っていくだけ。

気を許して鍵を開けると、ドアに突き飛ばされた。

「ルームサービスだ。」

入ってきたホテルマンがトレーの蓋を開け、中に隠してあった銃を取り出してこちらに向けた。

喫茶店でコーヒーを飲む。

目の前の女性達がビルの崩壊騒ぎについて話していた。

公園の丸い石の椅子に座って噴水を眺める。

空港に向かうタクシー

日本行きの飛行機

しゃべる

絶え間なく吹き続ける夜風は、見開いた目の表面を乾かす。

見開かれた目はただ夜の闇を意味もなく見続けた。

あいつがいた。

なぜ？

俺は、あいつと。

しばらく意識はグルグルと頭を周り、目の前の銃を視界が捉える。

と、同時に鳴り始めたポケットの中の携帯電話が意識を現実の場所に引き戻した。

目標は！

まるで夢を見ていたようで、思考がまだ霧かかっている。

とりあえず携帯の着信音を無視してスコープを覗くと、部屋の中の

男たちは全員空中を見ながら目を見開いていた。

白昼夢みたいなのを見ていた間に何か起きたのか、状況が整理しきれていない。

ただ、今わかるのはポケットの中で携帯が鳴り続けていると言うこと。

この携帯は仕事の依頼主にしか番号を教えていないため、かけているのは必然的に依頼主という事になる。

そして、依頼主の以来はビルの屋上で白昼夢を見る事ではなくて今夜現れる日本人男性を殺す事だ。

まだ霧がかった思考を無理やり働かせ、意識をもう一度スコープに集中させる。

照準をグレースーツの男性の頭部に合わせたところで頬に当たる風の感触で風が出ている事を思い出た。

すかさず照準を少し横にずらし、引き金を絞ろうとした時、照準の向こう側で目を見開いていた目標の男性が口をパクパクさせながら首を回してこちらを見た。

気づかれた？

そんな馬鹿なはずはない、夜の視界では向こうのビルからこちらを視認できるはずがない。

だが、そんな考えをよそに男性は見開いた目を恐怖に歪め、腕を上げてこちらを指さす。

ありえない。

思考は驚愕しつつも指が引き金を引く。消音式の狙撃中からはピシユンツと乾いた射撃音とともに空の薬莢が排出された。

男性は後ろに倒れる。

しかし、銃から射出された亜音速弾は窓に小さな穴を開け、男性の頭部ではなく壁を貫いていた。

初弾を外した。経験からしてもここで取るべき行動は逃げるという選択なのだが、ポケットで鳴る携帯の着信音がその選択を頭から捨てさせる。

逃げようとする男性の体に照準を当て直し、続けざまに引き金を引く。銃の乾いた射撃音と葉莢の地面に落ちる金属音が断続的に響いた。

窓ガラスは粉々に割れ、男性のシャツからはいくつもの血の跡が広がりはじめた。

やったか？

安堵しかけた時、窓からこちらを見ながら電話を掛ける黒スーツの欧米人が見えた。

応援を呼ばれた。

この際目標の生死確認は後回しで逃げる事を最優先として、依頼主には後でお詫びするしかない。

即座に銃に丸い粘着物を貼ってから立ち上がり、手前にある柱にも同様の粘着物を投げつける。

上るときに使った階段ではなく、設置されたばかりのエレベーターに向かって走った。

エレベーターのドアをこじ開け、シャフトの中央に垂れ下がっているワイヤーロープに向かって腰から二丁拳銃を抜き放ちながら飛び込む。

ワイヤーロープとの接触ざまに拳銃でロープを挟み込んで重力に任せて落下する。

ワイヤーと銃が摩擦で火花を散らして落下速度を落とし、やがて見えてきたエレベーターの箱に着地した。

摩擦で軽減しきれなかった着地の衝撃で足に鈍痛が走り、思わず膝をつく。

痛む足の代わりに、手でエレベーターの箱の天井部分を破って中に入ると扉の外から叫び声がした。

「いたぞ！ エレベーターの中だ！」

想定外の敵の動きの速さに歯ざしりをする。

持っていた銃を扉に向けて引き金を数回引き、粘着上の黒い物体を射出した。

片方の銃は先ほどの摩擦で銃身がやけてしまつて使い物にならないので投げ捨てる。

「こじあける！」

扉の外からは罵声が響く。

入ってきた時に破つた天井の穴にむかつて飛び、懸垂の要領で上つた時、ついにエレベーターの扉がこじ開けられたようで、数人分の足音が箱に入ってくるのが聞こえた。

ポケットからスイッチを取り出してそれを躊躇なく押し込むと、上の階とエレベーター内部で同時に爆発が起きた。

爆発の衝撃で下の階へと落下をはじめたエレベーターの箱から飛んで、扉がこじあけられた1階のフロアにかるうじてしがみつく。

既に疲労が限界にも達しそうな筋肉を無理やり動かして這い上がった。

「くそ」

扉付近に倒れていた黒ずくめの男の一人が立ち上がろうともがいていた。

「まだ息があつたか。」

男たちに粘着上の黒い粘着物を一発ずつ撃ちむ。

「なんだ、これ。とれねえ。」

「生かしておくと厄介なんだ。許せ」

自分の体についた粘着物を取ろうとする男をしり目に、持っていた銃のカートリッジを床に叩きつけて黒い粘着物をそこらじゅうにばらまく。

すでに綺麗に整備された1階フロアの正面玄関から出た後、右手でスイッチを押しこんだ。

16年前 イタリア マンションの一室

日はまだ明るく、日陰に立つこのマンションの室内にもいくらかばかりの日光が入る。

白いシャツと黒いシャツを着た二人の少年はくっつきそうなほど顔を寄せ合って小さな窓から隣のマンションを見ていた。

「なあサガラ、これどうするよ?」

黒いシャツを着た少年は白いシャツの少年に聞く。

「うーん、お前が先に特攻して俺がそのあとから突っ込む。」

「なんでだよ! ぜってえ生き残れねえ」

「それじゃー建物ごとぶつとばす?」

「あのなあ、ビトーのファーザーに言われたのは暗殺だぜ、暗殺。」

ふつとばしたら暗じゃなくてただの殺じゃねーかよ。」

「まどろっこしいなー。じゃーどうやってあの人数の手下を潜り抜けてカルロのところまでいくのさ。」

「それを考えてくれよ。」

「やっぱ爆発。」

「だめだなこりゃ」

黒いシャツの少年はあきらめたように首を振って後ろを向く。

「ローザなんかいい案あるか?」

少年は後ろにいるイタリア人少女に尋ねた。

少女は首を縦に振ってうなずき、紙を取り出して建物の図を描き始める。

「ふんふん、裏に通気口があるからそこに行けると。」

「それでもあの人数は無理だな。どっちかが正面で引きつけるか。」

「俺やる!」

「あ、待てサガラ!」

白いシャツの少年が止める声もきかずにドアを飛び出した。

残された黒シャツの少年は口の端を引きつらせながら開け放たれたドアを見た後、少女に言う。

「ローザは先に帰っててくれ、あとは俺とあいつでやるよ。どーせ今回もあいつはボヤを起こすんだろうけどさ。」

少女はクスクス笑いながらうなづく。

「そんじゃ、いっちゃやるか。」

気合を入れた少年は少女が先ほど図で書いた裏の通気口へと向かうため、部屋から出た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8017y/>

タイムジャン！クション！

2011年11月27日15時48分発行